４．研究会「メルジオフスキ教授、ヴィダー教授」連続研究会

１．研究会「西欧中世文書形式学の現在」
日程：2009 年 11 月 21 日（土）13 時 30 分より
場所：慶応義塾大学日吉キャンパス独立館　206 教室
共通テーマ：西欧中世文書形式学の現在
報告：
マーク・メルジオフスキ（インスブルック大学教授／MGH 共同研究員）
「カロリング帝国における政治コミュニケーション　―文書形式学の視点―」
"Politische Kommunikation im Karolingerreich: Der Blick der Diplomatik"
エレン・ヴィダー（チュービンゲン大学教授）
「ドイツにおける中世後期に関する歴史学と文書形式学」
"Geschichtswissenschaft und Diplomatik des Spätmittelalters in Deutschland"

２．研究会「中世古文書学（文書形式学）の現在　―ドイツと日本―
The Diplomatics on Medieval Germany and Japan in the process of Renewal」
（人間文化研究機構総合推進事業「人間文化研究資料の多元的複眼的比較研究」共催）
日程：日程：2009 年 11 月 22 日（日）13 時より
場所：慶応義塾大学日吉キャンパス独立館　206 教室
共通テーマ：中世古文書学（文書形式学）の現在　―ドイツと日本―」
報告：
高橋一樹（国立歴史民俗博物館准教授）
「古文書学と史料学　―日本中世を中心に―」
"Diplomatics and Medieval History in Japan: reflections on methods and current issues"
マーク・メルジオフスキ（インスブルック大学教授／MGH 共同研究員）
「ドイツ語圏における文書形式学とモニュメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ」
"Die Diplomatik im deutschsprachigen Raum und die Monumenta Germaniae Historica"
エレン・ヴィダー（チュービンゲン大学教授）
「書記官長と尚書局：中世後期の文書形式学への新しい接近」
"Kanzler und Kanzleien. Neue Zugange zur spätmittelalterlichen Diplomatik"

インスブルック大学教授、MGH 共同研究員のマーク・メルジオフスキ教 Mark MERSIOWSKY と、チュービンゲン大学教授のエレン・ヴィダー教授 Ellen WIDDER をお招きしての連続研究会を開催した。今回の来日は、人間文化研究機構の招聘によって実現し、本科研ではお二人の滞在費の一部や研究会開催のための諸経費を負担した。しかしながら、招聘の折衝から、会場の確保、滞在中の対応、研究会における通訳にいたるほとんどすべての業務を担当されたのは、本研究の連携研究者でもある慶應義塾大学の岩波敦子教授である。また、滞在中は、国立歴史民俗博物館の高橋一樹准教授には、とりわけ同博物館での史料解説を初めとして、多々ご配慮いただいた。人間文化研究機構の研究リーダーである国文学研究資料館の渡辺浩一教授、高橋一樹准教授、そしてとりわけ岩波敦子教授には、この場をかりて、あらためて厚く御礼申し上げる。

メルジオフスキ、ヴィダー両教授については、旧知の間柄である岩波教授による紹介に譲るとして、ここでは、研究会の趣旨について一言しておきたい。

今回の研究会は、前近代アーカイブズ史料の国際比較プロジェクトに長く携わってこられた渡辺浩一教授が、近年進めておられる共同研究の一環として企画された。渡辺教授は、日本とヨーロッパの比較、とりわけ、後者の圧倒的な影響のもとに生まれたとされる日本古文書学と、西欧の文書形式学の関係について本格的に検討することを目標に掲げられたが、このような企画には、単に西欧文書形式学や史料刊行に深く通じているだけではなく、国際比較や史料論の深化という現代的動向への鋭く柔軟な感性も要求される。メルジオフスキ、ヴィダー教授は、素晴らしい報告を準備されただけでなく、日本史をはじめとする諸領域にわたる日本人研究者との質疑に積極的に加わられ、史料現象のみならず、学問研究のあり方というレヴェルでも、これまでにない深い学術交流を実現された。

二回の研究会は、それぞれ「西欧中世文書形式学の現在」、「中世古文書学の現在　―ドイツと日本―」をテーマとして設定されたが、ともに西欧文書史料学の現状を再考するという点で共通する。メルジオフスキ教授は、初日の西欧中世史研究者向け研究会では、現在西欧学界でもっとも熱い関心を集めているテーマの一つであるコミュニケーション論と文書論との関係について紹介された。２日目の研究会では、主としてドイツにおける文書形式学と史料刊行の歴史を再考しながら、現状と今後の課題を展望された。古典的な文書形式学の発展のなかでの現状の総括ともいえるメルジオフスキ報告に対して、ヴィダー報告は中世末期を対象とする本格的な文書学論として特別な注意を要する。1 日目は総論、２日目では各論として提示されたヴィダー教授の報告は、この学問のあり方自体の変容を如実に示すものであった。伝統的な文書形式学の本質は、証書系史料に限定された、類型論を主眼とする様式論の体系化であり、史料刊行（や真偽判定）と不可分の関係にあったが、このような方法論や関心は、中世末期以降の時代に関しては少なくともそのままでは適合的ではないのである。いわゆる業務系資料の本格的検討とともに、政治、制度、社会史等との連携が不可欠であり、極度に洗練された学問伝統のもとに、独自の学界を構成している西欧史料学の世界にあっても、一般の歴史学との協調関係がこれまで以上に求められている。

本報告書では、１日目研究会でのお二人の報告原稿を再録した。ついで、岩波教授による報告者の紹介、最後に、１日目のメルジオフスキ報告を対象とする、中世初期の専門家によるコメントを掲載している。２日目研究会については、人間文化研究機構の研究報告書に、諸報告ならびに質疑の様子が掲載されるはずである。あわせてご参照いただきたい。なお、２日目のメルジオフスキ報告、1 日目のヴィダー報告は、合わせて西欧中世文書形式学の歴史と現状を総覧するものであるが、岩波敦子教授のご配慮により、近々中に、有名学会誌に公表される予定である。